

巖谷小波が朝鮮に「読ませた」童話：朝鮮児童文学 と巖谷小波 その四

金, 成妍
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/8497>

出版情報：九大日文．7，pp.36-48，2006-04-30．九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

巖谷小波が朝鮮に「読ませた」 童話

——朝鮮児童文学と巖谷小波 その四——

金成妍

はじめに

一九二三年六月二四日から七月一四日までの二〇日間、巖谷小波は朝鮮半島の二〇ヶ所を巡回し六〇回のお伽口演会を開催した。そのいわゆる「全鮮巡回お伽講演会」については、前回の『九大日文』六号（巖谷小波が朝鮮に「聞かせた」童話「朝鮮児童文学と巖谷小波 その三」）で詳細に述べている。「全鮮巡回お伽講演会」を大成功裏に終えた小波が帰国してから四ヶ月経った一九二三年一月二五日から、『毎日申報』紙上には「日曜附録婦人と家庭」欄が新しく設けられる。

一九二三年一月二五日付『毎日申報』の「日曜附録婦人と家庭」欄に掲載されたものを紙面の上段から概観すると、次のとおりである。「週評、女子解放問題」、「通俗談話、難産と安産（一）」、「薪炭節約と改良温突」、そして「子どもの文芸」欄が設けられている。また、「童話、幼い子ども」、作文「少年木こり」、短編小説「創作、傷」が掲載されている。さらに、公

立普通学校四年生による「夕陽」という題名の自由画が載せられている。次のページの上段には、巖谷小波の童話「白蛇の出かけた後（上）」と、山石生という筆名をもって日本語で書かれた「東洋の兎さんと西洋の亀さん」、そして「笑話」が掲載されている。

『毎日申報』に新しく設けられた「子どもの文芸」欄に登場した最初の童話が、小波の作品であったことは注目に値する。小波の童話が掲載されるまで、『毎日申報』に童話が全く掲載されなかつたわけではない。『毎日申報』には、一九二二年一月一日、「懸賞文芸童話」欄が設けられ、懸賞募集によつて募られた読者の「童話」が掲載されていた。これが『毎日申報』における最初の「童話」の掲載だと考えられる。この企画による掲載は同年一二月にも一回見られるが、小波の童話以前に『毎日申報』紙上に童話が載せられたのはこの二回だけである。小波の童話の掲載に至るまで、『毎日申報』に掲載された童話は次のとおりである。

（掲載日、題名／著者名の順）

一九二二年一月一日日曜日

猿の祖先／東月 犬の心臓／崔在甲

今朝／金股想 ガプトリの犬と猫／朴亭律

一九二二年一月二三日土曜日

踊る魚／鄭遇尚 哀れな少女の昇天／芸峯生

以上の作品を概観すると、「猿の祖先」と「今朝」は、児童の作文と日記である。「犬の心臓」「ガブトリの犬と猫」「踊る魚」は、伝来童話を再話したものであり、「哀れな少女の昇天」は外国童話の再話（マッチ売り少女）である。すなわち、『毎日申報』において童話作家による本格的な童話の掲載は、小波による作品が最初だったのである。

一九二三年一月二五日から掲載された小波の童話は、一九二四年三月三〇日まで、およそ一五回にわたって全一篇が紹介された。この一篇の作品は、『近代文学研究叢書』所収の「巖谷小波、著作年表」にも載っていない。最初に掲載された『白蛇の出かけた後』には、「この童話は東洋の童話王として名高い日本の巖谷小波先生が特別に毎日申報のために新しく作ってくださいましたものと」と明確に表記されており、それ以降の作品には「巖谷小波」の名前が漢字で明記されている。

『毎日申報』がハンゲルで発行されていたため、小波の作品はすべてハンゲルに翻訳されている。翻訳者の名前は記されていない。『白蛇の出かけた後』の上編と中編の冒頭部には、「場所と人物の名前を朝鮮のものに変えようとはしましたが、なるべく原作に傷が付かないようにそのまま翻訳致しました。」と、なるべく原作をそのまま翻訳したことを明記している。しかし、その次の作品からは、編集部による記述が一切ないため、翻訳程度は確認できない。

また、『毎日申報』に掲載された小波の童話のすべてに、かなりの割合を示す大きさの挿絵が用いられている。そのなかで、

『白蛇の出かけた後』と『鶴の塔』に用いられた挿絵には、「坦」という署名が手書きで記されている。他の作品の挿絵には、署名が記入されていない。『毎日申報』の要請に応じた小波が、「創作」童話をはじめ、一篇の童話を朝鮮に送りつづけたと仮定する場合、この挿絵も小波が日本から原稿と一緒に送つたものなのか、それとも後から毎日申報社によって付け加えられたものなのか、その二つの可能性が考えられる。そのどちらであっても、挿絵に対する考察は童話の分析において欠かせない要素となる。

口演童話を通して、朝鮮の人々に「聞かせる」活動を行なった小波が、今度は『毎日申報』を通して童話を「読ませる」活動に着手した。本稿では、『毎日申報』に掲載された小波の童話を紹介するとともに、そこにどういものが語られ、またどういものが描かれていたのかを考え、その童話のもつ性格を明らかにしたい。

用語の説明

歴史的・思想的コンテクストが曖昧になることを回避するために、原則として日本統治期の半島を表す表記に、朝鮮を使用することにした（一八九七年から一九一〇年までは大韓帝国を略して韓国と表記する）。

『毎日申報』に掲載された小波の童話

(掲載日、題名、著者名、挿絵の順、題名訳は筆者による。)

- 一九二三年十一月二五日
白蛇の出かけた後(上) / 巖谷小波 / 挿絵有り・(挿絵の)署名有り
- 一九二三年二月二日
白蛇の出かけた後(中) / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名有り
- 一九二三年二月九日
白蛇の出かけた後(下) / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名有り
- 一九二三年二月一五日
象の責任 / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名無し
- 一九二四年一月二日
童話 鶴の塔(上) / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名有り
- 一九二四年一月二〇日
童話 鶴の塔(中) / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名有り
- 一九二四年一月二七日
童話 鶴の塔(下) / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名有り
- 一九二四年二月三日
童話 黄金の小魚 / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名無し
- 一九二四年二月一〇日
童話 三兄弟の分財 / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名無し
- 一九二四年二月一七日
童話 蛙とコウノトリ / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名無し
- 一九二四年二月二四日

童話 蛙とコウノトリ / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名無し

一九二四年三月二日

童話 神様とネズミ / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名無し

一九二四年三月九日

鷹と亀 / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名無し

一九二四年三月一六日

人間と寿命 / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名無し

一九二四年三月三〇日

童話 老人と知恵 / 巖谷小波 / 挿絵有り・署名無し

『毎日申報』の「日曜附録婦人と家庭」欄に初めて掲載された童話である『白蛇の出かけた後』は、上・中・下に分けられて、一九二三年一月二五日から同年一月九日までの三週にわたって掲載された。毎日申報社の編集部は、小波が毎日申報のためにこの童話を特別に創作したと、場所と名前など、なるべく原作をそのまま翻訳したことを明記している。

本稿で取り上げる童話の引用は、『毎日申報』に掲載されたものの字句と使われた漢字を忠実に訳したもので、筆者による。『白蛇の出かけた後』は、次のように始まる。

水はいつも秋のように静まり、山がまるで屏風のように周りを取り囲んでいる静かな川辺には、近日に至り変な噂が伝播されて、その丘に住む人々の心を少なからず騒がせます―この川辺の潮水が最近一ヶ月前から急に高く

なつて、まるで絵のような景色で名高い岩島の變天島が、下から約三分の一程度水に沈んでいるのは、何かの災難が起る兆しではないか？ 百年前に大きな海嘯が起つたときも、このようなことがあつたようだが、あのときは、この辺の小さな島がいくつも水の中に沈んでしまひ、今でも波が静まり返つたときは、屋根が見えるつて？と、年寄りたちは顔をしかめて、心配そうに話し合ひました。

海を見下ろす丘にある静かな村には、数日前から海水がどんどん高くなつてきて、そのうち村を襲うかもしれないという噂が流れている。村から見下ろせる海辺には、「變天島」という綺麗な岩島がある。村には、變天島に関する伝説が伝わっているが、話の続きは次のように語られている。

この變天島は小さい島であります、その中央の岩の上には、いつから出来たものなのか、小さい神堂（社のこと―筆者注）があります。そのなかには、大きい白蛇が住んでいて、この辺に災難があるときは、その白蛇が水を渡つて陸地の方に、人間が住んでいる村に上がつてくるといふ伝説があるのを、村人はみな信じています。そのため、もし今度も、本当に災難が起りそうになつたら、必ずその白蛇が渡つてくるといひます。

高まつている海水とともに高まる不安によつて、他の漁師たちがみな海に出ることを恐れるなか、信太（韓国語の読み方はシチー―筆者注）だけは、平気で漁に出ていた。信太は、「先祖代々漁師で、生まれつき快活な性格をもち、いつも遠くまで出かけ、松魚（鱒のこと―筆者注）を釣るときにはしばしば危ないことをして友達をぞつとさせる若い漁師」である。今度も信太だけは噂を信じる人々をあざ笑ひ、「愚かな人々！ 海嘯が起るときは、潮水が低くなるものだ。それが、反対に高まつていることは、決して海嘯が起らないという証拠だ。」といひながら、一人で漁に出かけていた。

ある日、いつものように釣船を漕いで海に出た信太は、變天島の前を通りながら、ふとあの白蛇に関する伝説を思い出す。そして、「聞くところによれば、海嘯が起る場合には、白蛇がわざわざ陸地に知らせに来るそうだ。それはあまりにも申し訳ないことだ。今日はこつちから先に尋ねて、海嘯が本当に起るかどうか聞いてみよう」と、變天島に入つていく。變天島に釣船を泊めた後、白蛇が住んでいるという、神堂の左側にある岩下の洞窟を覗いた。しかし、白蛇はどこにも見当たらず、洞窟には大きな亀がいるだけであつた。そこからの語りは次のようである。

洞窟のなかには、大きい亀が平らな岩の上になうづくまつていました。信太は意外に思つて驚きましたが、ためらうことなく声をかけてみました。「オーイ、亀や！ 主人はどこに行つたの？」まるで人間に話すように。そうしたら、そ

の亀もまるで人間のように答えました。「竜宮に行つたつきりまだ帰つて来ないよ！」

（ここまでが、一月二五日付に掲載された、『白蛇の出かけた後』上編の内容である。新聞では中央に挿絵があり、それを囲むように童話が載せられているが、絵には話の冒頭部分の記述が映されている。線描が主となつて、「水はいつも秋のように静まり、山がまるで屏風のように周りを取り囲んでいる静かな川辺」の風景がスケッチされている。また、「近日に至り変な噂が伝播されて、その丘に住む人々の心を少なからず騒がせます」といつた状況を反映するように、加えられた明暗は全体的に暗い印象を与える。

この童話の舞台には、海辺の丘にある村と、その村から見下ろした海のところにある、變天島という岩島が設定されている。變天島が海に沈んでいくのを見た村の人々は、災難を予想し、海嘯を恐れて、生きる糧である漁まであきらめる。また、災難が起こる場合は、變天島に住んでいる白蛇が、それを知らせるために村に上がつて来るという伝説を、村の人々はみな信じている。たつた一人、信太という若者だけが、その噂に左右されず、いつもの通り漁に出かけている。噂を信じ切っている村の人々を愚かに思う信太であるが、白蛇の伝説については、少しも疑いを持たない。ついには、災難が本当に起こるかどうかわか白蛇に直接聞いてみるために、一人で變天島に入つていく。

ここで、話のなかで信太がどのように描かれているかを再確

認しておくことにしよう。それをすることによつて、この童話のもつ意味がより明らかになると考えるからである。

先祖代々漁師である信太は、快活な性格で、いつも海の遠くまで漁に出たり、友達を心配させるほど大胆な行動をとつたりする若者である。このような信太の性格は「桃太郎」を連想させる。冒険心が深く、無邪気で腕白な性格、それに、積極的にどんどん進んでいく進取の気性に富むところは、「桃太郎」の特徴でもある。すなわち、「桃太郎主義」に基づいた理想的な若者像として信太は描かれているのである。それに、先祖代々漁師であり、いつも遠くの海まで出かけている信太の姿には、島国根性を脱して海国少年の気概を養おうと唱えていた小波の少年観が反映されていると考えられる。

再び、話の続きをみていきたい。『白蛇の出かけた後』中編の挿絵には、信太と亀が対面する場面が描かれている。また、「海嘯」は、「海溢」という言葉に入れ替えられている。白蛇に留守番を頼まれたという亀は、信太に自分の代りになつて留守番をしてくれとお願いをする。「最近海水が高くなつて砂場に卵を産めないのさ。遠くに行つて卵を産んでくるから待つていてくれよ」と言いながら、亀はどこかに行つてしまい、信太は白蛇の洞窟で留守番をすることになる。退屈になつた信太が、煙草に火を付けようとしたが、洞窟の湿度でなかなか火がつかない。やっとマッチに火がついたとたん、どこからか雷のような大声がして、びっくり仰天する信太の前に、いつの間に戻ってきたのか、白蛇がとぐろをまいて信太を睨み付けている。

引きつづき『白蛇の出かけた後』下編は、白蛇と信太の会話が中心に語られている。信太が變天島に来た事情を説明すると、白蛇は次のように答える。

「それなら心配いらぬぞ。海水が高くなつたのは、大したことじゃない。俺は今年で三百六十歳なんだ。こう見えても竜宮の海龍王の親族なんぞ。六十年に一回は必ず竜宮に行つて、海の色んなことを相談してくるのだ。でも最近は何のせいもか体が堅くなつてさ、海水が高くなると泳ぎにくいのだ。」

結局、海水が高くなつていたのは、白蛇が龍宮に行くのに泳ぎやすくするためであつた。それに、もう白蛇が帰つたため、海が以前のように穏やかになつていた。「あくよかつた。だつたら、もうしばらく津波は来ないだろうね。」という信太に、白蛇は、「そうだ。他のところにはあるそうだが、こつちには津波が来ないように談判をして来たから、村人によろしく言つてくれ。」「万歳！万歳！」と、信太が万歳をあげ、躍つているところに、先の亀が現れて、自分の代りに留守してくれたお札に黄金の卵を一個くれる。信太は、嬉しいあまりその日は漁もやめて、さっそく家に帰つたというところで話は終わる。挿絵には、手に卵を持った信太を見送る白蛇と亀が描かれている。村の人々が信じた通り、村の守り神である白蛇は存在した。村全体を襲つていた噂を信じることなくたくましく行動してい

た信太は、白蛇の伝説に対しては疑いを持たず、それゆゑ直接白蛇に会いに行くという行動をとる。信太の勇敢な行動によつて事実が明らかになり、村の人々の不安は解消される。このように、『白蛇の出かけた後』には、「信ずること」と「桃太郎」のような理想的若者像が信太を通して語られている。

名前の信太は、初めて使われた上編において、ハングルの「シんテ」にカッコ付で漢字の「信太」と明記されている。その次からは、ハングル表記のみ記されている。場所と人の名前を、なるべく原作のまま翻訳したという編集部の記事を信じて、この「信太」という名前も小波によつて付けられたと考えられる。

前述したように、一篇の童話のなか『白蛇の出かけた後』にだけ小波が「創作」したこと、原作のまま翻訳したことが明記されている。その内容においても、小波が四ヶ月前の朝鮮巡回お伽講演会を通して朝鮮の人々に直接聞かせた話と相通するところがある。また、災難の兆しに怯えている人々の不安と動揺を治めるといふ、この物語の展開の仕方には、童話が掲載される二ヶ月前に起こつた関東大震災への懸念も考慮されたと考えられる。

それに加えて、見逃せないことが一つある。『白蛇の出かけた後』が日本のある昔話を喚起させているということである。「浦島太郎」である。「中国の神仙思想の影響」、亀の恩返しという「動物報恩のモチーフ」、「龍宮の存在」など、『白蛇の出かけた後』はその全体的な構成が「浦島太郎」にとても似て

いる。信太が住んでいる村を朝鮮半島に、龍宮を日本に置き換えて解釈することも十分可能である。

『白蛇の出かけた後』が「浦島太郎」の改作だとすると、そこにはどういふ効果を狙った意図が隠されているのか、様々に想像することが出来る。この二つの物語の関連性を論じるためには、まず、「浦島太郎」という日本の昔話が当時朝鮮半島にどのくらい普及されていたのかを調べる必要がある。現在、その作業中であるため、『白蛇の出かけた後』と「浦島太郎」の関連性については、稿を改めて論じることにする。

話を戻して、『白蛇の出かけた後』の次に掲載された『鶴の塔』を見ていきたい。『鶴の塔』は、病気にかかった親をもつ親孝行の少年が、千辛万苦を経て薬を手に入れるという、昔話の再話である。主人公の名前には、「福童（ボットン）」という、朝鮮で当時よく名付けられた親しみのある名前が用いられている。父親が重い病気にかかる、親思いの福童は毎日神堂に参り、父親の病気が治るようにと、神霊（民俗上のすべての神―筆者注）に祈る。ある日、福童の夢に神霊が現れて、東の方に三百里（約二〇キロメートル―筆者注）離れている万寿山というところに行く、父親の病気を治せる霊薬があるが、それを一日の間に父親に飲ませないといけないと教えてくれる。夢から覚めた福童は、さっそく万寿山に向って走り出す。これがこの話の発端部分になる。「万寿山」は、中編から「千寿山」と記述されている。

福童が百里を走って行くと、橋も船もない川が現われて、

泳いで渡ろうとしたら、一匹の亀が現れる。乗せてあげるといふ亀の親切を断って、福童が自分の力で川を渡ろうと思うと、川がなくなる。また、二百里を行くと、大きい岩山が道をふさいでいる。今度は鷹が現れて助けようとしたが、福童は自分の力で登ろうとする。すると、岩山がなくなる。福童がやっと千寿山にたどりつくと、大きい鶴が千年間作った霊薬が金色の千寿山の三〇層の塔のてっぺんにあるという。塔のなかに入ると、階段も梯子もない。呆然とする福童の前に先の亀と鷹が再び現れ、助けようとするが、福童は最後まで自分の力でやろうとする。福童の行動に感動した鶴が、金色の丸い薬を出してくれて、福童は無事に家に帰り、父親は元気になったという話である。

三回の難関が設定されて、一つの難題が出されるたびに、動物や老人、童子などが現れて助けられるという類型は、昔話によくあるパターンである。しかし、『鶴の塔』の場合は、助けを断り、自力で乗り越えようとすることによって望んだものが手に入るという設定となっている。

『鶴の塔』の次に掲載された話は、『黄金の小魚』である。ある漁師が不思議な鮒を釣って、その鮒を放してやることで大金持ちになる。しかし、それは鮒の事を秘密にするという約束付きであった。いきなり大金持ちになった漁師を、村の人々は、泥棒に間違いないと誤解し、やむを得ず漁師は大金持ちになった訳を話す。すると、すべてが消えてしまい、まずしくなった漁師は再び魚に出る。すると今度もこの前と同じ鮒を釣ったのである。鮒は、自分の身を六等分に切ってくれとお願いをする。

鮒を六等分に切ると、その二切れは金色の百合の花束になり、また二切れは二人の金童子となり、残りの二切れは、二匹の馬になる。これから漁師の息子になると言い出した二人の童子は、百合の花を漁師に預けた後、馬に乗ってどこかに去り、すぐにたくさんの宝物を馬に乗せて帰ってくる。こうして漁師は、再び一日で世界一の大金持ちとなったという話である。この話は、釣ったものを放してやって金持ちになるか、釣ったものから玉か何かをもらって金持ちになるか、昔話によくあるパターンが変型されている。特に鮒の身を六等分に切って、その二切れずつが何かに変わるという構成は、珍しいものだと考えられる。その部分については、考察の余地を残しておく。

この『黄金の魚』という話は、「むかしある海辺に、まずしい漁師一人が住んでいました」で始まる。『毎日申報』に掲載された小波の童話のなかで、『白蛇の出かけた後』と『鶴の塔』を除いた九編の作品は、「むかしむかしあるところに」で始まる昔話型である。教訓または諷刺を含めたたとえ話で、寓話あるいは現代イソップ物語の類型である。なかでも、『象の責任』、『蛙とコウノトリ』（二編）、『雁と亀』は、動物寓話である。

その内容を簡略に紹介しておく。

まず、『象の責任』の内容は次のようである。

むかしある暖かい南国の広い土地に、おいしい草が生い茂って、そこに住んでいる獣たちは幸せな日々を送っていた。ところが、この土地においしい草があるという噂を聞いて、あつちこつちから鳥たちが飛んできては、勝手に草をとって行く。あ

わてた獣たちは、みんな集まって鳥退治の会議を開く。象に長い鼻を振り回してもらおうという狐の提案にみな賛成するが、象の大きい足で草がつぶれるのを心配したネズミの考えによって、木の板に象を載せて実行することにする。獣みんなが力を合わせて、象を載せた木の板を持ち上げ、野原を駆け回りながら、鳥を追い払うことに成功する。しかし、たくさんの獣の群によって、草がすべてつぶされ、次の日からは食べるものになくなってしまふ。

『蛙とコウノトリ』は、同じ表題で一九二四年の二月一日と同月二四日に掲載された。二月一七日掲載の『蛙とコウノトリ』から見ていくと、次のような話である。

むかしある美しい湖では、蛙たちが自由に過ごしていた。蛙たちは、王様から支配を受ける世界に憧れて神様に王様を下ろしてくれるようにお願いする。神様は最初、大きい柱を下ろしてやるが、命のない柱に不満をもつ蛙たちは、再び神様をお願いをする。すると、神様は、大きいコウノトリを下ろしてやって、蛙たちはそのコウノトリに一匹も残らず全部食べられてしまふ。

二月二四日掲載の『蛙とコウノトリ』は、愚かなネズミと蛙の話である。蛙がネズミに泳ぎを教えてあげるといつて、ネズミの片足と自分の片足を草で結んで、川に飛び込む。苦しくなったネズミが放してくれと頼んでも、面白くなった蛙は楽しく泳ぎ回る。しばらくたつてネズミが死んでしまつても、蛙は泳ぎ続ける。そのとき、川に浮かんでいるネズミの死体を見た

鷹が飛んできて、ネズミを捕つて飛び上がる。それで、蛙と愚かなネズミは鷹に食べられる。この話には、コウノトリは登場してない。表題は、編集部による何らかの手違いがあつた可能性が高い。

『雁と亀』の話の内容は、仲良しの亀が住んでいる湖が日照りて枯れてしまい、心配になった二匹の雁が、他の湖まで亀を運ぶことよつて起こるハプニングである。雁は、葦の真ん中を亀にくわえさせ、その両方の先を自分たちがくわえて、亀に絶対口を開かないように注意させた後、飛び上がる。ある村を通りかかったとき、その様子を見た人々が口を合せて醜いと言いながら亀に悪口を浴びせる。頭に来た亀が、人々に向つてぶんぶんと腹をたてた瞬間、亀は地に落ちつて散り散りに砕けて死んでしまう。

『三兄弟の分財』には、崔南善が雑誌『子どもの読物』第七号（一九二四年三月五日）において用いた西洋の漫画のような挿絵が、横長く真ん中に載せられている。むかしある農夫が、長男には鶏一匹を、次男には鎌一つを、三男には猫一匹を財産として残して死んだ。三兄弟は与えられたものをそれぞれ持つて金儲けに出かける。長男は北の端つこにある野蛮国に入り、まだ鶏を見たことのない野蛮国の人々に鶏を売つて、馬にいっぱい黄金を載せて故郷に帰ってくる。次男は、鎌を持つて山奥に入る。そこは、豊年になつていたが、鎌がないために稲刈りが出来ないところであつた。そこで次男は鎌をたくさんの黄金に換えて、故郷に帰つた。そして三男は、猫がいらない小さな島国

に行く。そこは、ネズミが多くて人々が困つてるところであつた。そこで三男は、猫を船いっぱい黄金に換えて、故郷に帰つてきた。

『老人と智慧』も昔話の再話で、次のような話である。むかしある国に、年寄りを捨てる法律が立てられていた。しかしこの国のある大臣は、年取つた父親を到頭捨てられなくて、洞窟に隠したまま世話をしていた。ある日、この国の王様のところに、天から鬼が下りてきて、自分が出す問題を解けないと七日目の日にこの国を滅ぼすという。鬼は四つの問題を出す、すべて大臣の父親が容易く答えて、国は危機から免れ、それから年寄りを大事にするようになったという話である。鬼が出した問題は、一問目は蛇の性別を区別すること、二問目は象の重さを量ること、三問目は切られた木の切れを見て、どつちが根の部分を当てる問題、そして最後は、二頭の馬を見てどちらが親でどちらが子かを見分ける問題である。

『神様とネズミ』の挿絵は、草と丘の線描の類似から、『象の責任』の挿絵と同人による作品ではないかと考えられる。

ある神様が人間の世界に下りて来て、子どもたちがネズミを虐めているのを見る。ネズミが虐められるのは、その体が小さいためだと思つた神様は、ネズミを猫に変えてやつて、自分の家に連れて帰る。ある日、神様が外から帰つてみると、猫は大きい犬にかみちぎられ、血まみれになつていた。かわいそうに思つた神様は、今度は猫を犬に変えてやつた。しかし、犬が人々に虐められているのを見た神様は、犬を虎に変えてやる。す

ると、生意気になった虎は、神様を殺して自分が王様になろうと思ひ、神様を襲う。そのとたん、虎は元のネズミに戻つてしまふ。

最後に『人間と寿命』は、この世界が出来たばかりの頃の話である。世界を治めていた神様が、人間、ロバ、馬、犬、兎、あひる、兎、猿などの動物を集めて、みんなの寿命を決めることにした。最初に出てきたロバに、三十年ではどうだと聞いてみると、ロバは、朝から晩まで人間に引っぱられ使われているのが大変だから三十年は長すぎるという。神様はロバに二十年の寿命を与える。次に出てきた犬にも三十年を提案するが、犬は一日中ほつき歩くので三十年はきつといひ、神様は犬の寿命を三年に決める。その次の猿には、君は働くこともなく森の中に引き籠つているから三十年でどうだと聞くと、猿は毎日人間に躍りや可愛いしぐさを演じさせられているため、三十年は大変だと答え、十年の寿命を与えられる。しかし、一番後に出てきた人間だけは、他の動物とは違つて三十年は足りないと言ひ張る。それで神様は、三十年にロバと犬と猿の年を合わせた七十年の寿命を与えてやる。こんなわけで、人間は、三十歳までが一番楽で、その次からはロバのように働き、またその次からは犬のようにあちこち歩き回つたり、猿のように片隅に引き籠つたりするのである。そして、完全に年をとつてしまつた後は、子どものようなしぐさをするようになるが、これはもうろくすること、まるで猿がかわいしいしぐさを演じるようなものである。

以上のような童話一一編が、『毎日申報』の「日曜附録婦人と家庭」欄を通して発表された小波の童話である。一九二三年一月二五日新設された「日曜附録婦人と家庭」欄は、大きく紙面の上限に横長い絵入りの「日曜附録婦人と家庭」という表題を掲げていた。それが、一九二四年四月六日からは「婦人と家庭」に略され、他の記事の見出しと変らない大きさになつて、規模的にも縮小されている。つまり、「日曜附録婦人と家庭」欄は、小波童話の始まりとともに現れ、小波童話の終わりとともに變つてゐる。

それにもう一つ、小波童話の登場の他に注目すべきことがある。それは、「山石生」による日本語童話の存在である。小波の『白蛇のうけた後』上編が掲載された紙面の左側には、「山石生」による「童話」、『東洋の兎さんと西洋の亀さん』が掲載されている。「山石生」による童話は、この一回だけでなく、一九二三年一月三日に『老人と孝子』、同年一月九日に『二匹の猫とお猿さん』が掲載されている。その掲載時期は、『白蛇がうけた後』の上、中、下と一致している。小波の童話と並んで全三回掲載されたこの日本語の童話は、総督府の御用紙とはいへ、ハンゲルを専用としていた『毎日申報』からみると、非常に珍しい。

山石生の童話のうち、最初に掲載された『東洋の兎さんと西洋の亀さん』の全文を次に引用してみる。

亀と兎のかけくちで、兎がねむつて亀にまけたといふの

(をばり)

は、皆さんごせうちの筈の話ですが、今でも（七行、判読不可―筆者注）それがどうした、よくよくおきよ。世界の内、一ばん先に開けたのが東洋。東洋とは我々仲間の住んでる所。三千年前の孔子さまも、孟子さまも、お釈迦さまもキリストさまも皆我々のお仲間よ。キリストさまが西洋人と思ふのはうおちがひそんなに東洋の大兎さん中々、足がはやいので、西洋兎さんどんなにいそいでも、どうせばんまでかゝるだらう。といふので、インドの兎さん、毎日々々大きな木の下でねむつてばかり。シナの兎さんアヘンをのんで、ねてばかり。朝鮮兎は長きせる、くわへてオンドルでねてばかり。内地の兎は大ねぼう、三百年もねむつてた。兎がねむつてゐるひまに、西洋兎は、けんめいに、走つて行つたおかげさま、世界の文明は西洋の一人ぶたいと兎さんが、大ごゑあげて叫んだを、聞いてさめたは内地の兎。内地兎は五十年前から目ざめて一生懸命。とうとう兎に追ひ付いた次にさめたは、朝鮮兎。日韓併合その時に、目さめてからは一心に、横目もふらず走つてゐる。もうすぐ兎に追付さうそれそれごらんよ一生けんめい。愉快々々。一こうさめぬはインドとシナよ、内鮮兎が足なみそろへ、朝起ラツパと、進軍ラツパ。朝鮮兎よめざめよ。東洋兎よ大耳立て。目玉むき出し横目もふらず、兎の足許みだれたはづみ、すかさず進め大兎。あゝ愉快々々。もうすぐだ、進め、進め！

朝鮮と内地とインドを眠つた兎に例え、西洋を兎の眠つてゐる間に走り出した兎に、シナは眠つてゐる兎に例えられてゐる。兎が眠つてゐる間に走り出した兎が、世界文明の表舞台に立つて叫ぶ声に、一番早く目覚めて追いかけたのが内地兎で、その次に走り出したのが、日韓併合によつて目覚めた朝鮮兎だと述べてゐる。このような「東洋中心主義」を強調する語りは、一週間後に掲載された『老人と孝子』においても続けられる。『老人と孝子』は、親孝行の意味と、親心を説明したものであるが、そこでは、「朝鮮は昔から東洋の礼儀国と唱へられて居る。それで親に孝行をすること、長者を大事にすることは此地の美德とせられて居る。世の中が進むにつれて此美德は益々発達させて行かねばならぬ。」と述べられている。また、少年に向つて、「このことは皆さん少年の方々にお願ひせねばなりません。少年といふものはそんなに大きな力のあるものですよ！」と、話しかけてゐる。

日本帝国が志向した思想や文化について、分かりやすく語つた前の二編に比べ、『白蛇の出かけた後』の下編と並んで掲載された『二匹の猫とお猿さん』は、短い童話である。この話は、「或所に二匹の猫が居ました、玉ちゃんのみゆうちゃん。」で始まつて、「この猫ばかりではない、世の中には、ちようどこんな猫のまねをする人が少くない。お互朝鮮（二文字欠、以下欠と表記―筆者注）生活する人は（欠）家内の人だ、互に力をあ

はせ心を一にして愉快に暮らせよう！」で終わる。仲良しの二匹の猫が、一緒に牛肉の塊を拾うが、お互いに自分が先に見付けたと言いつ張って喧嘩になる。そこに猿が現れ、半分に分けてやると言いながら結局は自分で全部食べてしまうという内容である。話の最後には、話とは何の関係もない、「お互朝鮮(欠)生活する人は(欠)家内の人だ、互に力をあはせ心を一にして愉快に暮らせよう！」という「内鮮融和」に立脚した言葉が付されている。

小波の童話は、一九二四年三月三〇日の掲載を最後にして、同年四月六日からの「婦人と家庭」欄には、小波童話の後を継いだ李定鏞の童話が登場する。小波童話の掲載において、『白蛇の出かけた後』と『象の責任』の表題には、それぞれ蛇とネズミの絵が、そして『雁と亀』、『人間と寿命』の表題には山の絵が描かれていた。『蛙とコウノトリ』(二編)、『神様とネズミ』には、ハンゲルで「童話」とジャンル名が記述されており、『鶴の塔』から『三兄弟の分財布』までは漢字で「童話」と、そして最後の作品『老人と智慧』には、山の絵にハンゲルで「童話」のジャンル名を記述している。李定鏞の童話には、その表題に全て漢字で「童話」と記述されている。李定鏞の童話は、形式面においても、内容面においても、小波のものと同様で、作家の名前だけが変っているような印象を与える。李定鏞の童話は、「むかしあるところに」で始まる昔話の再話と、イソップ物語の類型である。一九二四年四月六日『蠟燭のなかの王女』、四月一三日『欲張り王様』、四月二〇日『難しい三つ

の問題』、四月二十七日『不思議な人』が掲載されている。

李定鏞(一九〇六―一九三八)は、号は微笑、児童文学者、児童文化運動家、口演童話家として評価されている。「天道教少年会」の創立メンバーとして、開闢社に入社し、『オリニ』の編集長を務めながら『新女性』の編集にも参加していた。『毎日申報』に童話を掲載していたのと同時期には、『オリニ』を通して持続的な執筆活動を展開、世界各国における少年の英雄談を主に連載していた。『オリニ』二巻二〇号(一九二四年一〇月一日)に仏蘭西少年の話、三巻六号(一九二五年六月一日)と三巻七号(一九二五年七月一日)にアメリカ少年の話、三巻八号(一九二五年八月一日)に英国少年の話、そして三巻九号(一九二五年九月一日)には仏蘭西少年の話を載せている。

『京城日報』の記事によると、一九二三年六月に行なわれた小波の朝鮮巡回お伽講演会の開催目的は、「朝鮮における童話の普及のため」であった。朝鮮における童話の普及のために、「童話普及会」まで組織され、積極的に小波の口演を実行していた。また、『京城日報』と共に小波のお伽講演会を主催した『毎日申報』は、一九二三年一月から「子どもの文芸」欄を設け、四ヶ月間一五回にわたって二篇の小波の童話を紹介した。それが『毎日申報』における最初の童話作家による本格的童話の掲載となった。

それでは、『毎日申報』以外の、当時朝鮮に発刊されていた新聞・雑誌に童話が掲載されたのはいつ頃からののか。朝鮮で行なった小波の童話執筆活動が、朝鮮における童話の普及にどれ程の

影響を及ぼしたのか。

このような問題に対する検証は、『九大日文』次号を借りて引き続き論じることにする。

【注記】

1 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学叢書』（昭和女子大学近代文学研究所、一九五六年）

2 この記事の原文は次のようである。「이 동화는 동양의 동화왕으로 일
흔이 높은 일본 암곡소과 선생이 특히 매일신보를 위하여 새로히 지
여 보내 주신것입니다. 처소와 사람일흔을 도선것으로 곳치라하앗습니
다만은 될수 잇는대로 원작에 흠집을 내이지안케하라고 그대로 번역하
앗습니다」

ここで、「처소와 사람일흔을 도선것으로 곳치라하앗습니다만은（場所と人物の名前を朝鮮のものに変えようとしたが）」の「곳치라하앗습니

다만은（変えようとしたが）」の記述は、「変えようとしたが」とも「変えるようにおっしゃいましたが」とも解釈できる。つまり、どちらの解釈をとるにしても、小波の意見が反映されたことには変わりがないと考えられる。『毎日申報』の一九二三年一月二十五日付。（筆者訳）

3 小波は、明治三十一年の「メルヘンに就いて」で武島羽衣の註文「壮大なる想像を馳せて、少年の気宇を豁大ならしめよ。」に答えて、「小生不肖と雖も私かに他日の大鵬たらんと期する者に御座候。元来日本人は、兎角島国根性を免れず、小感情、小義理、小功名、小利慾にのみ馳られ、神經質にのみ成り勝なるは、大に慨嘆すべき事と存じ候。されば少年教育の如きも、あまりコセつきたるは宜しからず、所謂大器の晩成を期して、小供は矢張り小供らしく、大様に育てるが肝腎と存じ候。」という考え方を述べていた。佐藤通雄、『日本児童文学の成立・序説』（大和書房、一九八五年）、一二頁。

（九州大学大学院博士後期課程三年）